

# 「小説」とはなにか

飛鳥井雅道

- I 「小説」の概念について
- II 「ノベル」と「アイデヤル」
- III 坪内逍遙の科学主義
- IV 馬琴における「小説」
- V 透谷の「幻界」論

## I 「小説」の概念について

日本における近代文学理論の誕生が、基本的に、坪内逍遙の『小説神髓』によるものであったこと、および、その理論の実作が、『<sup>三讀</sup>讀当世書生気質』によるものであったことは、今さら言うまでもない。1885年（明治18）であった。この小説論と実作が、日本の近代文学を強くゆがめてしまったことについても、これまで語られ続けてきている。1930年代以来、この逍遙を基礎とする文学論を否定しようとする試みは、平野謙の「破戒論」、および中村光夫の1950年における『風俗小説論』、そして1959年の同じく中村光夫による「ふたたび政治小説を・『小説神髓』を否定する」によって、ほぼ全面的に展開されきったと言ってよいであろう。

先まわりして言えば、中村光夫の『風俗小説論』の文学史的な骨格は、1930年代に平野謙が作りあげていたものである。また、その理論の背景になっているのは、本多秋五の一連の歴史小説論の実証に基礎をもっていた。そしてさらにその背景には、1930年代から導入されてきたジェルジ・ルカーチのリアリズム論と歴史小説論がひかえていたのである。自分の理論の源泉について率直に語ったのは、おそらく本多秋五と平野謙のみであった。しかし中村光夫も、1930年代の圧倒的なマルクス主義文学論の影響下に自分の理論を構成していったことを、誰も否定することができない。

「風俗」と坪内逍遙は言った。風俗に文学がとらわれ流されていくことを、中村光夫のリアリズム論は、しかし全面的に拒否しようとしたのである。

したがって、リアリズムにこだわることのない篠田一士は『日本の近代小説』において、また丸谷才一は多くのエッセイの中で、風俗小説論を一時期の文学史的事実として軽侮し、小説には風俗の存在が最低限必要なのだと主張する。現在の小説の基準から考えて、風俗小説を否定することに熱心だった中村光夫や平野謙が、ある意味で影響力を喪失していくことはやむを得ないのかもしれない。リアリズム万能が否定されると同時に、泉鏡花や幸田露伴の復権が最

近20年ほど強力に行われていることは決して無関係ではない。しかし、今わたしが問題にしたのは、泉鏡花や幸田露伴を復権するにしても、それが既成の近代小説の枠内でしか考えられていないところにとどまっていることである。

逍遙が問題にしようとしたのは、実は近代内部の問題ではなく、近世と近代にまたがる、そしてそのはざままで自分の小説論をうちだそうとした人間の苦闘そのものだったのである。逍遙を否定しようとした中村光夫は、その点をほとんど理解できなかったと言えるのではないか。1959年における中村光夫は、『小説神髓』を否定すると言う時、「ふたたび政治小説を」と記したが、中村光夫の視野の中には、まだ近代の文学史的展開しか見えていなかったと言ってよいであろう。

本来から言えば、中村光夫は『小説神髓』を否定する場合に、近代文学史内部での対立概念たる政治小説をもちだすのではなく、近世的な読本の伝統を提起すべきであったはずである。戦後のわたしたちの文学論は、これまで近世と近代をあまりにもはっきり分けすぎていた。この稿は、「小説」の概念の成立をめぐる、でき得るかぎり近世と近代、言いかえれば江戸と明治を統一して考えたいと願うものである。

坪内逍遙がうちだそうとした小説論は、「人情世態風俗」を正面から説くように見えながらも、実はふたつの点においてきわめて特徴的であった。

文化いまとしほ進むに及びて世の人やうやく羅マンズの荒唐無稽に倦むよしあり羅マンズしたがつて衰へいはゆる真成の物語（那ベル）おこる其沿革の次第のごときは更に下條にときわくべし

ローマンス否定は、決して坪内逍遙の1885年前後における専売特許ではなかった。直接には、坪内逍遙のまわりに流入してきた東京大学の教師たちの理論は、すべてローマンスを否定することによってのみ成り立っていたのである。たとえば、A. Bain の *English Composition and Rhetoric* 以下の書物は、少し古い大学の書庫には数種ずつ保存されているほど普及したもののだが、ここにおける進化論と科学主義は、単にハーバード・スペンサーの社会進化論が日本で流行したと言う以上に、学生に直接に教場を通じて強い影響を及ぼしていた。

今わたしが問題にしようとするのは、日本近代における科学論一般といった問題ではない。文学とは、また小説とは、いったいどのようにして近代の中に再生してきたのであるか。小説は、坪内逍遙の「小説」論によって、かなり強いダメージをうけたまま、結局その逍遙的「小説」概念が文壇の中心的地位に座ることになった。二葉亭四迷や硯友社をも含めて、さらには発表機関としての『読売新聞』『早稲田文学』を含めて、そしてさらには1890年代以後の演劇活動、日清戦争直後の『太陽』の評論欄を含め、坪内逍遙が文壇を支配したことだけは、決し

て否定できないのである。

われわれは森鷗外と坪内逍遙との1890年代における没理想論争によって、あたかも坪内逍遙が鷗外に論破され影響力を失ったような錯覚をもっている。これは決して正しくない。確かに、坪内逍遙は「細君」一作によって小説の筆をこそ折っていたが、文壇的には鷗外よりはるかに強い立場を維持していた。鷗外は小説の筆を折っただけでなく、軍内部においても小倉へ左遷され、文壇からも一時期葬られたのである。鷗外は小倉から、「鷗外漁史とは誰ぞ」によって鬱憤をはらさなければならなかった。この時期の文壇を、わたしたちは硯友社支配の文壇と考える習慣になっている。しかしその硯友社の背後には、逍遙が存在した。なぜ現在から見て弱点の多いとみられる逍遙こそが、文壇の中心的地位を担い続けていたのか。ここでわたしは、逍遙が考えた「ノベル」の概念の影響力を、あらためて捉えなおさなければならないと考える。

## II 「ノベル」と「アイデヤル」

坪内逍遙の読書体験の出発は、戯作、特に馬琴への傾倒からはじまり、作品としての出発は、本来スコット、リットン、さらにはシェイクスピアの翻訳からはじまっていたはずであった。しかしなぜ彼は、その過去の文学的経歴を全否定することによって、「ノベル」のみを文学的基準と考えるようになったのであろうか。先にふれたように、19世紀科学主義の風潮の中では、「ラウマンズ」とは絵空事、逍遙の言葉によれば「奇異譚」であり、その本質は架空癖と考えられていたのであった。

架空癖とは昔のよみほん小説や艸冊子にあるやうなる世の中にありそうにない事を実際に行ふて見たく思ふ癖をいふなり（『二談一当世書生気質』）

さらにもう一箇所。

まことにおろかなる振舞なり。架空の癖はもとよりして。色恋にのみ限らねども。最も恐ろしきは架空の恋なり。兼好法師が徒然艸にて「身を惜しとも思ひたらず。たゆべくもあらぬわざにもよくたへ忍ぶは。たゞ彼の色を思ふゆゑぞ。と穿ち兒にて宣たりしは。是通常の恋の上なり。常の恋だに尚且然り。況んやアイデヤル〔架空的〕の恋情をや。佳人才子の奇遇を羨み。そを身の上になぞらへたる。我身の行のおぞましきよ。さもあらばあれ架空の病は。行はずしては悟るに由なし。行つて後に非を悟るは。已に後れたるに似たりと雖も。智慧浅はかなる凡夫の身にては。之を如何ともすべきやうなし。経験は智識の母。蹉躓は覚悟の門。あゝ田の次。我身もろともザイセルフ〔汝が身〕は。わがおろかなるア

イデアリズム〔架空癖〕の unfortunate victim〔不便な犠牲〕で。ありけるぞや。今は不実といはるゝとも。結句そなたの幸なり。また我為の幸福なり。pardon me〔ゆるしてくれよ〕と小町田が。自問自答のひとり語。洋語まじりにつぶやきたる。其語気さながら西の国の。稗史を学ぶごとくなるは。尚架空癖のすつかりとは。脱ぬしるしと思はれて。聞く人ありなば笑止と思はん。(同上)

関良一は、『逍遙・鷗外 考証と試論』において、逍遙がアーネスト・フェノロサによって導入されたヘーゲル美学におけるイデアールを理解できていなかったと、強く非難している。しかしわたしの考えでは、1880年代の日本の科学界においては、科学主義・進化論の方が、ヘーゲルなどより有効と考えられていたのであって、しかもおそらくは自然科学主義と言っているであろうが、この万能の風潮を、逍遙、さらに鷗外、さらには若き夏目漱石にいたるまで、はずして考えることは、おそらく無意味であろう。逍遙における科学主義がいかに徹底していたかについては、石田忠彦『坪内逍遙研究』が詳しく触れるところである。

逍遙とて、『<sup>三</sup>讀<sup>三</sup>歎<sup>三</sup>当世書生気質』を書きはじめた時は、架空癖を全的に否定する予定はなかったふしがある。小説の冒頭で、書生・小町田と血縁のない義理の妹・田の次とを会わせ、読者はこの恋愛が当然展開するものと信じ、また彼もこの恋愛をプロットとして、展開させたいと願っていたはずである。すくなくとも、小説のはじめ半分の構成は、田の次と小野田との出会いに中心が置かれかけていた。しかし、逍遙はそこに「架空癖」否定を持ち込んできた。小町田の恋愛は、架空癖の名によって否定されなければならなくなった。ここで第二の主人公として登場してくるのが、守山である。架空癖について作品中で言いたてるのは、分別ありげな、のち弁護士になっていく守山なのであり、小町田の夢への脱出の希望は、いちいち守山から否定されることになってしまう。そしてその世界にあらわれる男女関係は、矢場の女、遊女といった人々しか正面にはすえられなくなり、やがて小説は、架空癖を否定する逍遙としては、本来あってはならないはずの、守山と田の次が実は本当の兄妹であったという、兄妹再会物語へと転化してしまう。『当世書生気質』が近代小説として成立するためには、小町田と田の次との恋愛が成立するか破綻するかは別にして、そのこと自身がより全面的に追求されるべきであった。突然、兄妹再会といった、逍遙流に言えば「およそありさうもないこと」に結論を求めしまった彼は、小説の出発点と結末において、まったく矛盾した、おそらくは本来の意に反した状況をかかえこんでしまったと言わずばなるまい。1880年代の東京の学生生活が風俗的によく描かれていると評されることも、最近では多くなったが、この小説に登場する学生たちは、飲酒、放蕩、寮の門限違反等々を繰り返しはするものの、決して人間としての危機的状況に直面しようとはしない。守山が弁護士になること、また他の男が留学すること、これはすべて彼らが内面の危機を回避することによって1880年代の明治社会の状況に適応していく姿をの

み描きだしているのである。

『書生気質』の末尾に逍遙が記した文章は、逍遙の苦悩を表現していた。

殊には当編の眼目といつば。兄妹再会といふ事にありて。書生の気質といふことにあらねば。其表題には背くに似たれど。作者は専らに意匠を凝らして。前者に都合のよき趣向を設けつ。為に当今の書生の気質を漏なく描きいだす手順にいたらず。作者も遺憾なりと思ひしぞかし。就中最も残をしきは作者が本来の目的なりける。書生の変遷を写し得ざりし事なり。書生の変遷とは何をかいふ。曰く其習癖其行為の変遷なり。譬ばはじめ軽操なりし人も。年経て沈着になる事なり。書生の頃放蕩なりし者が。却つて老実なる實際家となるあり。或は卒業して役にたゝざる人あり。或は浅学にして用ひらるゝ事あり。其変転万態千状。一々此ところに言ひがたけれども。写さば面白さは限なからん。

逍遙の大学時代からの友人高田半峰は、友情をこめてではあるが、『書生気質』を痛烈に批判しなければならなかった。

通読するに其中談諷の分子頗る多く能く人の顔を解くの妙あるも人情切迫して秋嘆極りなき悲哀的の分子に至りては暁天の星の稀れなるが如き憾なき能はず書生気質は頗る Humour と Wit との元素を含蓄すると雖も Pathos に於て大に足らざる所あり能く Comedy の趣を備ふるも Tragedy の分子を含むこと尠し。

半峰はさらにきつい注文まで出している。『書生気質』の中には、“Powerfull Character”がないというのである（「当世書生気質の批評」半峰居士『中央學術雑誌』1886年）。

しかし、逍遙はこの親友からの批判を骨身にしみて理解したではあろうが、もはや引き返すは不可能だった。彼は架空癖をあくまで排するとした。「為永春水の批評」に逍遙は書く。

春水の著作の如きは抑も此両家〔デフォーとリチャードソン——飛鳥井〕のいづれに似たりや思ふに春水の著作の如きは全く此二者と異なる者なり春水はありさうなる事件も写さず又ありさうなる人物もつくらず寧ろ現にある事件を擬作し又は現にある人物を作れり所謂主実稗史家（Realist）といふものにて彼の理想家とは異なる者なり

馬琴を「ラウマンス」として否定し、リアリストとして人情本作者・為永春水を評価する方法は、どのようにして成立してきたのであろうか。逍遙のこの立場が成立すれば、読本否定、人情本肯定が、以後近代文学の主流となっていくであろう。

### Ⅲ 坪内逍遙の科学主義

逍遙は東大卒業後、東京専門学校（後の早稲田大学）に就職した。早稲田の外郭団体である『中央学術雑誌』には、かなりの逍遙の試験問題が掲載されている。主なものは、柳田泉『若き坪内逍遙』（春秋社）に収録されているから、それについて読まれたい。全文は、ナダ書房版の『中央学術雑誌』復刻に掲載されている。二例のみをあげよう。1886年7月の東京専門学校における学年試験問題である。残念ながら、英学部の問題は英文故として『中央学術雑誌』には掲載されていないが、政学部第一年級歴史の第一問は、

仏蘭西大革命の折柄に勢力を有したる政党幾何ありしや其名并に性質は如何其最も勢力ありしは孰れぞ

第三年級心理学の第三問は、一見作家逍遙らしくは見える。

外面の徴候に依りて他の感情を察し得可きや若し果して察し得可きものならば誠に一箇の人物を仮作し其外面の徴候を描写し而して之に依りて其感情の如何を推測せよ

しかしこれでは、あくまで外から観察することによって心理を科学的に捉えようとする態度なのである。ほんの一部しか引用しなかったが、逍遙の出題において一驚するのは、逍遙の徹底的な自然科学への信頼である。心理学の問題においても、歴史学の問題においても、彼は科学と歴史の進歩を信じていた。たとえば、彼はフランス革命とギリシャ史にかなりこだわった出題を行っている。このような人物が、なぜ以後、文学に終生こだわることになったのか。

逍遙の本性をいかす道は、逍遙が1880年代に苦勞し身をこそげようとして、自分の愛読した滝沢馬琴を否定し、江戸戯作を否定し、そして自分が知ったばかりのイギリスのリットン、スコットを否定する道ではなかったはずである。

逍遙の文学史的教養は、実は決してそれほど深いものではなかった。『小説神髓』の冒頭に、彼はかなり無理な文学史論を展開しようとしている。

盛んなるかな我国に物語類の行はるゝや遠くしては源氏狭衣浜松住吉あり降りては一条禅閣の戯作類をはじめとして小野の阿通の浄瑠璃物語等あり近くしては西鶴其笑風来京伝のともがら前後物語をかきあらはして虚名を一世に博してより小説ますます世に行はれて世の狂才ある操觚者流は皆争ふて稗史をあらはし或は滑稽洒落なる三馬一九の垂流あれば人

情本に名を残せる春水其人の如きもあり種彦は田舎源氏に其名をとゞろかし馬琴は八犬伝に誉をとゞめぬしかるに革新の変あるに際して戯作者しばらく後を断て小説したがつて衰へし

たとえばこの文章に引用されている『源氏物語』。一部分は、大学の授業で習ったことはあったらしいが、本気に読んだ形跡はない。まして関良一の考証によれば、本居宣長の源氏論『玉の小櫛』をすら、巻一は確かに読んだ形跡はあるものの、巻二以下にいたっては、どうも読まれた形跡はないという。今度わたしなりに確認すると、巻一がすべて読まれていたかどうかも疑わしい。古典の問題だけを言うのではない。「一条禅閣の戯作」という表現から見ても、はたして読んでいたかどうか疑わしい。西鶴を読んだかどうかすら、当時の西鶴本の流布から見て、知識として江戸の大家作家という認識はあったろうが、逍遙自体の文学的認識に影響をあてるほどの読み方をしていただろうか、疑問と言わなければならない。つまり、東京大学文学部という授業の中で教えられる文学史は、きわめて限られたものだったのである。まして逍遙は、漱石とは違って文学専攻ではなく、政治学の学生だった。念のために付記すれば、当時、政治学専攻は文学部所属学生であった。逍遙が本気に全力をあげて読んだのは、大学以外で知った三馬、一九、春水、種彦、そして決定的には馬琴であったろう。

この稿においては、日本近代における馬琴にこだわりたい。逍遙は『小説神髓』の中で、小説は「美術」であると強調しようとした。そして「ノベル」に「小説」の訳語をあて、「ラウマンズ」と対立するものと考えた。「ラウマンズ」を彼は「中古の小説」と規定し、「ノベル」を「近時の人情話」と定義した。ここにも、逍遙の文学における「ラウマンズ」から「ノヴェル」への「進化」の考え方があらわれているのだが、しかし実際に逍遙が愛読し続けたのは、しばらくはあくまでも馬琴だったのである。彼は東京へ出てくる直前、馬琴に会った夢を見たとき、大正期になってから二度も語っている（『逍遙選集』別巻2）。

勸善懲悪を否定する八犬士を、「仁義八行の化物」と呼ぶことは、1880年代の科学主義全盛の時代においては、かならずしも無理なことではなかった。「ラウマンズ」を否定し、「ノベル」を主張すること、これも、かならずしも困難なことではなかった。しかしそこにおいて、「アイデアル」を全面的に架空癖として退けたことは、日本の近代文学を大きく縛る条件になったのである。二葉亭四迷の『浮雲』が、今ではあたかも『当世書生氣質』よりもすぐれた作品であるかのように言われているが、『浮雲』の成立事情の中に、『書生氣質』の分冊形式による発刊、この二葉亭への強い影響を抜いて考えるのは、およそ非歴史的というものであろう。

肝心なのは馬琴である。『小説神髓』の前半において、逍遙は馬琴の『八犬伝』をきわめて強く批判した。しかし、その逍遙も『小説神髓』後半においては、馬琴の『八犬伝』中に含まれる「稗史七法則」をしばしば援用して、小説論を展開しなければならなかった。すなわち、

1830年以後、小説理論について考え続けていた作家は、馬琴以外になかったのである。ちなみに、馬琴の死は1848年（嘉永元年）。『小説神髓』の書かれた年とまだ40年もへだたっていないのである。この馬琴をすべて否定したと当時の読者がうけとったのは、多分『小説神髓』前半の馬琴批判の鋭さによってであったろう。しかし問題は、そう簡単ではなかった。逍遙は馬琴を読み続けた。馬琴は1880年代ぐらまでは、逍遙の小説よりもはるかに広く読まれていた。1890年代の方がかえって馬琴が読まれていた、という調査すらあるが、これは今にわかには信じがたい部分もある。しかし内田魯庵が、少年時代『八犬伝』を13回読んだが、1887年以後は馬琴を一度も読んだことがない、と語ったのは（『日本名著全集・南総里見八犬伝 下』〔1928年〕に付された内田魯庵の解説）、期せずして『小説神髓』があたえた影響の強さ、すくなくとも『小説神髓』が世の風潮に見あって受け取られたことを示しているであろう。魯庵はこの年以後、急速に日本文学の伝統から離れようとして、やがてドストエフスキー『罪と罰』の翻訳に立ち向かうことになる。

馬琴の復活は、日清戦争直前の北村透谷「処女の純潔を論ず」を例外とすれば、そして北村透谷の論にはふたたびたちもどるが、日露戦争直後から1910年前後にひとたび行われた。饗庭篁村編の『馬琴日記鈔』（1911年）が出版され、さらに『八犬伝』も復刊された。復刊に力を貸したのは幸田露伴であった。しかし、饗庭篁村の馬琴日記理解は、もはや明治文壇生息者としてのきわめて自然主義的なものへと変貌していた。『日記鈔』は馬琴のつつましい、一方で自負心の強い部分を集中的に取り出してきているのである。この『日記鈔』のもとになった日記は、旧東京大学所蔵本を含み、東大本は関東大震災によって一部を除いて焼失したため、厳密に篁村の抄出方法を論定することはできないが、現存の早稲田大学本、天理図書館本を中心とする、中央公論社版『馬琴日記』全4巻と比較検討するだけで、篁村の馬琴理解の一種のかたよりは、あまりにも明らかなのである。『日記鈔』は、馬琴の人間を理解する上では不可欠な書物ではあったが、馬琴の空想力、逍遙言うところの架空癖にほとんど立ち入ろうとはしていなかったし、ほとんど興味を示そうともしていないのである。森鷗外はこの『馬琴日記鈔』に跋文を寄せ、かなり意地悪く、馬琴復活はそう長くは続かないだろうと述べた。そしてそれは事実となった。確かに、1920年代末から、馬琴の書物は大量に刊行されたが、これは、円本に刺激された徳川文学の刊行の一環として行われたものであり、馬琴の文学内容に立ち入った論は、ほとんど展開されなかった。

1910年代において、おそらくもっともすぐれた馬琴論は、露伴の「馬琴の小説とその当時の実社会」だった。若干長文の引用になるが、あえて引用しておきたい。

これはひとり馬琴に限って論ずる訳ではありませんが、すべて仮作物語の作者と実社会との関係を観察しますと、極端に異なつた類例が二種あるのであります。一つはその仮作物



#### 「小説」とはなにか（飛鳥井）

語と実社会と並行線なのであります。他の一つはその仮作物語と実社会と直角的に交叉線をなして居る、——物語そのものは垂直線をなして居るのであります。並行線をなして居るのは、作者の思想や感情や趣味が当時の実社会と同じであるところより生じ、交叉線をなすのは作者の思想感情趣味が当時の実社会と異なるところより生ずるのであります。京伝だの三馬だの一九だのといふ人々は即ち並行線の作者で、その思想も感情も趣味も当時の衆俗と殆ど同じなのであり、したがってその著作は実社会をそつくり写したやうな割合になるのです。馬琴に至りますと、杉や檜が天をむいて立つやうに、地平線とは直角をなして、即ち衆俗を抽んで挺然として自ら立つて居りますので、その著述は実社会と決して無関係でもありませんが、しかし並行はして居りませぬのです。時代の風潮は遊廓で優待されるのを無上の榮譽として心得て居る、そこで京伝らもやはり同じ感情を有して居る、そこで京伝らの著述を見れば天明前後の社会の墮落さ加減は明らかに写つて居ますが、時代はなお徳川氏を謳歌して居るのであります。しかし馬琴は心中に將軍政治を悦んでは居りませんでした。誰が馬琴の『俠客伝』などを当時の実社会の反映だとはいひ得ませう？馬琴以外の作者は実に時代と並行線を描いて居ましたが、馬琴は実に時代と直角的に交叉して居たのであります。時代の流れと共に流れ漂つて居た人で無かつたのであります。

この露伴の評論がすぐれているのは、露伴の実作に支えられていたからだとわたしは思う。「直角的」という表現の中に、わたしは、暴風雨の中に吹き倒されそうになりながらも屹立し続けた『五重塔』の象徴的反映を眺めたいと思う。『五重塔』は発表当時から、あまりに古風とすら評された。しかしここに描かれた、のつそり重兵衛のいちずな男性的な主情的精神は、今でも読者を決して失うことなく読まれ続けているのであり、こうした男性像を復権したことにおいて、露伴の馬琴論も生氣あるものとなっているのである。

#### IV 馬琴における「小説」

馬琴における小説概念が、逍遙のような「ノベル」ではなく、「ラウマンス」だったことは言うまでもない。一例をあげよう。

稗編小説は、蓋し正史の文を演べて、而して之を家喻戸曉せんと欲す。坊間野史の諸書は、乃ち風を捕へ影を捉へ、以て市井の耳目を眩ます。孰れか杜撰無稽反つて人の観聽を乱すを知らんと。今弓張月の一書は、小説と云ふと雖も、然も故実を引用し、悉く正史に遵ひ、並に巧みに一事を借り妄りに一語を設け以て世人の惑を滋くせず。故に源あり委あり、徴すべく拠るべし。（原漢文、椿説弓張月拾遺卷一）

この文章だけを正直に読んでしまうとすれば、勸善懲惡の理論化のように思われるであろうが、実は、馬琴の小説の魅力は、このような序文の小説論にあるのではない。小説世界が現実から高く飛翔してゆけばゆくほど、「正史」と小説の間の距離を、歴史的事実や考証によってその空想の小説世界を現実につなぎとめる意味を持たせるための立論だったのである。「悉く正史に遵ひ」といっても、鎮西八郎為朝が平安末に捕らえられ、伊豆へ流されたところまでは一応の史実をふまえているかに見えるが、『弓張月』の魅力は、その為朝が琉球へ脱出し、その王になり、さらに憤死した崇徳上皇の墓に詣でるといふ、正史とはまったく関わりない部分によっているのである。

さらに馬琴において小説とは、フィクションの意味にとどまらなかった。馬琴を中心とする文人たちが集まって記録したいいくつかの風俗見聞談である『兎園小説』は、おそらく現在では随筆と考えられるであろうし、事実『日本随筆大成』に収録されている。馬琴にはこの種の記録がきわめて多いが、読み続けていくうちに驚倒するのは、異事奇聞に対する強い好奇心であった。文政8年のある随筆には、鎮西八郎の矢といったものが友人たちの間に回覧され、彼らがそれをほとんど信じていないにもかかわらず、好奇心の対象として、寸法を記し、語りあい、図録を作った記事等々ものこされている(『旧版日本随筆大成』)。文化文政期の江戸の文人たちに、異常なほどの好奇心があふれていたことについては、かつて平田篤胤について記した時(拙稿「思考の様式」林屋辰三郎編『化政文化の研究』)、若干の分析を行っておいたから、今は省略するが、馬琴と篤胤の好奇心の持ち方は、驚くほどよく似ているのである。この記録をも、彼は小説と名づけていた。

馬琴が謹厳な人間であったこと、融通のきかない小心者であったことは、饗庭篁村が記し、また1930年代に真山青果が『随筆滝沢馬琴』に大成し、馬琴にきわめて同情的に記した通り、おそらく事実であったろう。しかし馬琴の中には、日常市井の異常な出来事から中世にさかのぼる奇譚までへの、おそろべき好奇心が隠されていたのである。だからこそ『八犬伝』の異様な世界が、道德の衣をまとった形でありつつも、そしてその衣を馬琴は建前にしたいと願っていただろうが、本音は道德以外の部分からしか発想されてはこなかったのである。

馬琴における考証癖は、空想を現実につなぎとめるピンの役割を果たしていた。『八犬伝』冒頭に、里見義実主従三人が安房へおちのびてきた時、竜をかいまみるエピソードが、延々と語られている。当時の読者にとっても、竜についての里見義実の講釈は、あまりにも長すぎ、不必要ではないかという意見があった程だ(『犬夷評判記』『徳川文芸類従』第12卷所収)。馬琴はこの批評に対して、かなりしつこい反批判を加えているが(同上書)、今わたしが興味をもつのは、竜の道德的解説の中に、思わず馬琴がもらしてしまっているあらゆる不可思議な事実への好奇心である。

天子のおん顔を、竜顔と称、又おん形体を竜体と唱、怒らせ給ふを逆鱗といふ。みな是竜に象るなり。その徳枚挙べからず。今や白竜南に去。白きは源氏の服色なり。南は則房総、々々は皇国の尽処なり。われその尾を見て頭を見ず、僅に彼地を領せんのみ。汝は竜の股を見たり。是わが股肱の臣たるべし。

上の引用が、義実の竜についての講釈の結論になるのだが、この結論だけでは、わたしたちは『八犬伝』をただちに投げ出してしまうことになるであろう。しかし『八犬伝』の世界とはそのようなものではない。前田愛はかつて『八犬伝』を「夜の世界」と表現したことがあった（前田愛著作集第一巻『八犬伝』の世界 夜のアレゴリー）。しかしわたしには、より正確には、その夜の中に「淫」の世界が含まれているとしか思えない。たとえば竜の講釈についての中で、次のような文章がまぎれこんでくるのである。馬琴の多弁、知識の噴出は、単なるペダンチズムではなかった。好奇心のかたまりの突出の側面はないだろうか。たとえば、

竜の性は淫にして、交ざる所なし。牛と交れば麒麟を生み、豕に合へば象を生み、馬と交れば竜馬を生む。

馬琴が引用したと称している典拠にも、この部分はおそらくあったのだろうが、完全に謹厳実直におしきるなら、かならずしも記す必要はない部分であろう。

そもそも、『八犬伝』全体の構想が、いかに中国の盤古伝説と『水滸伝』から影響を受けたものであったにしても、伏姫と八房という人間と犬の交感によって八犬士が生まれるというのは、ある意味ではかなりグロテスクな設定であった。馬琴は、このグロテスクさを十分に知っていたからこそ、歴史の故実をふまえると主張することによって、逆に実は空想力を制限されるまいと試みたのである。犬の八房は伏姫の魅力にとりつかれた。これは一応は馬琴によって、里見義実処刑された玉梓の怨霊に八房がとりつかれたため、と説明はされているが、道義的注釈は別にして、この欲望がいかに伏姫の経の功德によって取り払われていくにしても、かえって八房と伏姫の心の交わりは深くなり、八犬士が肉体的交渉なしに生まれ、このふたり（すなわち八房はこの場合すでに人間化している）の子供として里見家を支えることになるのである。伏姫が自殺し、かつ八房が金碗大助の銃弾で殺されても、のちのちまで八犬士に危機が起こる時、伏姫は八房の背に乗って、ここではもはや神女として、あらわれ続けるのである。作の後半で伏姫と八房は一体化している。伏姫はおそらく『八犬伝』の中で善女として唯一の魅力ある女性であったろう。しかし、善女は『八犬伝』の中の女性としては例外である。伏姫はグロテスクな環境に身を置くことによって、かつそこで、身を守ることによって、はじめて彼女の魅力を成立させたのである。

『八犬伝』の中で、一般的に魅力ある女性は、玉梓およびその亡霊・生まれかわり、また悪女船虫であり、一応貞節な女性とはされているが、犬塚信乃を深夜にかきくどいたまま捨てられ、薄命に倒れる浜路であった。1880年代の東京の学生たちの間で、浜路の口説きの場を暗唱していないものがなかったと言われるほど、この悲恋は影響力をもったのである。船虫や玉梓やその他の悪女たちについての回想が、あまり語られていないのは、むしろ明治以後の儒教道徳の生み出した制約が、欠落させたものと考えてよいだろう。もちろん、『八犬伝』が里見再興物語である以上、そこには数々の武勇伝が登場し、それも現在十分読むに耐える魅力を残している。たとえば、芳流閣の決闘なども、明治青年が愛読する部分だった。

しかし『八犬伝』の中で、やはりもっとも美しいのは、伏姫と八房が暮らす富山の洞であったろう。高田衛が岩波版『南総里見八犬伝』の解説に引用したことによって、1910年の死の直前の獄中の幸徳秋水が、富山の洞を美しく回想していることも、あらためて注目されてきた。『八犬伝』の秘密は、この富山の洞をいかに捉えるかにかかっていた。この秘密を解くのに成功した、ただひとりの近代作家こそが、北村透谷だったのである。

## V 透谷の「幻界」論

透谷が1892年（明治25）に発表した「処女の純潔を論ず」は、副題として「富山洞伏姫の一例の観察」をもっている。この論の書き出しは、一見きわめてキリスト教的な、馬琴とはおよそ遠いところから書き起こされている。

天地愛好すべきもの多し、而して尤も愛好すべきは処女の純潔なるかな。もし黄金瑠璃真珠を尊とせしめば、処女の純潔は人界に於ける黄金瑠璃真珠なり。もし人生を汚濁穢染の土とせしめば、処女の純潔は燈明の暗牢に向ふが如しと言はむ、もし世路を荆棘の埋むところとせしめば、処女の純潔は無害無瘻にして荆中に点ずる百合花と言はむ。

それまでの透谷は、いわゆる「ラウマンズ」にひかれてはいなかった。ヨーロッパ文学の教養によって、自分の文学概念を形成してきた透谷だが、ウォルター・スコットやリットンには、ほとんど興味を示していない。わずかに、ロマン派詩人としてのバイロンに傾倒していたことが証拠だてられるにすぎない。また彼は、いわゆるリアリズムにはこだわらなかった。むしろ現実に足をとられ、現実につなぎとめられることから、逃れようとしていたのだ。したがって彼は、みずからの生活においては失敗に終わったにしても、恋愛をのみ人生の価値と考えるようになっていたのである。したがって、透谷の馬琴論は、

「小説」とはなにか（飛鳥井）

わが国の文学史中に偉大なる理想家なしとは十指の差すところなり。近世のローマンサーなる曲亭馬琴に至りては批評家の月旦甚だ区々たり、われも今卒かに彼を論評する事を欲せず。細論は後日を期しつ、試みに彼が一代の傑作たる富山の奥の伏姫を観察して見む。

とはじまる。すなわち、透谷にとって、すべては伏姫にしばられてくる。

その結構より言ふ時は第一緝は序巻なり。而して第二緝の第一巻は全篇の大発端にして其実は八犬伝一部の脳髓なり、伏姫の中に因果あり、伏姫の中に業報あり、伏姫の中に八犬伝あるなり、伏姫の後の諸巻は俗を喜ばすべき俠勇談あるのみ。

透谷は意識的に、坪内逍遙の馬琴批判に反対する。

馬琴を論ずるもの徒らに勸善懲悪を以て彼を責むるを知つて、彼の哲学的観念の酬報説に論入せざる評家の為に惜まざるを得ず。勸善懲悪主義は支那思想より入り来りたる小説の大本の主義なれば馬琴と雖是に感染せざるを得ざるは勢の然らしむ所なるが、馬琴の中には別に勸懲主義排斥論をして侵犯するを得ざらしむるもの、存するあるなり。父義実の一言を誤らざらんとて、一身の破滅を甘んずるは、シバルリイの極めて美はしき玉なり、而して其の是を実行するに至りては海潮の干満整然として理法の円満を描くに似たり。

透谷は富山の洞を「幻界」と規定する。幻界であるがゆえに、八房と伏姫の心の交流が成立するのである。わたしは馬琴論において次のように美しい文章をいまだに読んだことがない。おそらく一言もこれにつけ加える必要はないだろう。読者が馬琴を知っていることを前提に、透谷が、筆を端折っている部分は若干あるが、あらためて分析しなおすとして、ここではこの透谷の文章を、小論の結語としてうちだしておきたい。

悪魔の魅力を仮用して高潔なる舞台を濁穢する泰西作家の妙腕は即ち馬琴が八房の中にある。始めは伏姫徐々として八房の後に従へり、後には八房伏姫を背にして飛鳥の如くに至れり、凡腦の人間を魅するの状を写す何ぞ一に斯の如く靈なる。輝武〔里見家の家臣一飛鳥井〕健馬に鞭ちて逐へども遂に及ばず、凡腦の魔力何ぞ人間の及ぶところならんや。雲霧深く籠めて、山洞又た人力を以て達すべき道なし、輝武の眼には川一条なり、然れども靈界の幻想を以て曰へば川一条は人界と幻界との隔てなり。「横ざまに推倒されて」以下の文章深く味ふべし。

人間の眼には川一条に見えても、この川一条が人界と幻界を隔てているのである。したがって、富山から霧ははれることなく、人はついに入ることができず、伏姫と八房はこの仙界においてのみ、異界の愛を達成することができたのであった。霧がはれた時、伏姫も八房も死に、伏姫は先に述べたとおり「神女」として八房の背にまたがって関東の各地を飛びまわり、八犬士たちの危機を救い、里見の一族を守護し続けるのである。

透谷は馬琴を、この論文の中で、「ロマンチック、アイデアリスト」と規定した。文学史的な定義としてなら、「ロマンチック、アイデアリスト」という言葉は、おそらく珍妙なものであろう。しかしわたしは、この奇妙な言葉ふたつの組み合わせの中に、透谷の逍遙に対する二重の否定を読み取らなければならないと考える。逍遙の「アイデヤル」否定への反対、リアリズム万能への反対の両面である。この二重の否定によってこそ、透谷は富山の伏姫の美しさを再確認できたのである。透谷は富山の洞を「トラヂエダイ」とよんだ。そして透谷は1894年（明治27）、自分の作品をほとんど完成することなく、みずから命をたった。

馬琴について残されたのは、先にも触れたとおり、日記や馬琴の私生活に関するきわめて自然主義的な解釈と、一方では、近代とはまったく切り離された一種好奇の対象としての作品論、この分裂のみが進行したのである。われわれは今あらためて近世と近代の区別を取り払い、本来「小説」とは何だったのかを問い返さねばならぬ時期にさしかかっているのである。